

【事業実績】

【アーティスト・イン・スクールプログラム】

地域のアート NPO や群馬大学と協働して、小・中学校へアーティストを派遣する「アーティスト・イン・スクール」事業を3校で実施しました。



(1)「第六中学校」

×

住中 浩史

無編集の映像作品をグループ制作するプログラム。アーティストの住中浩史氏と美術教員、学芸員、コーディネーターが協働で授業開発と実践しました。現代の中学生はスマートフォンなどで YouTube をはじめとした映像コンテンツに親しむ一方で、学校の美術科教育における映像メディア学習の実践は非常に少ないのが現状です。そうした断絶を繋ぎ、自分の考えを映像として表現する力、試行錯誤を繰り返しながら作り上げる力、映像から作り手の意図を読み取る力を育むことを目指しました。※第 59 回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会の公開授業としても開催

【先生たちの声】

外部の方と関わることが生徒たちにも良い刺激となり、それが彼らにとっての「リアルな表現」を引き出すことができたのだと感じました。(美術教諭・鈴木先生)

【子どもの声】

映像づくりは初めてで不安でしたが、班のみんなと試行錯誤していくうちに楽しくなりました。アイデアを出し合って一つのものを作り上げるのはとても楽しかったです。(3年生)



(2)「勝山小学校」

×

尾花 藍子

言葉を使わずに相手とコミュニケーションをとるワークショップを実施。児童、先生、スタッフ全員が参加者となり、2人1組になり、身振り手振りやアイコンタクト、動作などが徐々にルールで制限されていく中で、子どもたちは探りながらコミュニケーションの方法を編み出しました。同時に、コミュニケーションが「取れない」感覚を味わい、日頃意識しにくい周囲の環境や生活の音、人の気配などに耳をすませ、全身で感じ相手に表現するということを体験。尾花藍子氏がダンスの振付や演出をするときに大切にしている手法を、ワークショップで実際に体感してもらいました。

【先生たちの声】

描く、つくるといった一般的な図画工作の学習ではなく、言葉やジェスチャーなどを使わずにコミュニケーションを図る等、子どもたちにとって初めての経験であり、戸惑いもありましたが、とても新鮮な体験となりました。(吉野校長先生)

【子どもの声】

- ・普段しゃべってるから新鮮に感じました。
- ・いつも使っている言葉が使えなくなって不安な感じになった。
難しかった。
- ・目をつぶるとコミュニケーションがあんまりとれないけどやってみたら案外伝わったりしたので身近でもできるように頑張りたい。
- ・目をつぶると誰かが横にいたり近くにいることは絶対に気づかないと思った。
- ・人が自分の近くを通ったとき、あったかく感じたり冷たく感じた。(全て5年生)



(3)「桃川小学校」

×

中島 佑太

2017 年度、2018 年度は主に図工授業の教員の補助を行い図工に苦手意識を持つ児童たちにも表現することの楽しさをアーティスト独自の視点から伝えてきました。2019 年度はこれまで通りの図工授業の補助のみならず、アーツ前橋の収蔵作品である近藤嘉男の《足尾風景》(1950 年) から中島自身の現代アートの作品までを児童とともに鑑賞しながら、社会の問題や課題に対して美術がアプローチできることを児童に感じてもらえるような授業を組み立てました。作家の近藤嘉男が足尾銅山へ自ら出向き調査を行い作品を描いたように、児童たちには自分の目の前にいる相手の話をよく聴き、聴いた話から作品を制作することの意味を一緒に考えました。

【先生たちの声】

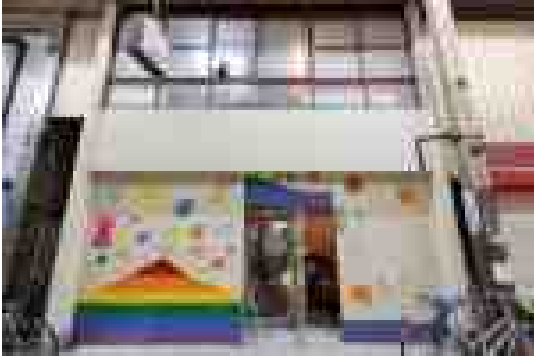
「アーティスト・イン・スクールって何だろう？」子どもたちは普段と違う図工の授業を楽しみにしていました。画用紙からペンを離さずに描き続けるなど新鮮な活動が多く、今後の創作活動に活かしていければと思っています。(4 年 木暮先生)

【子どもたちの声】

- ・「授業」という枠じゃない気がした。しばられていない感じ。みんなが自然体になれる気がした。賛同できないものをメモする授業で、みんなそれぞれ賛同できないものがあって、そんなことが賛同できないのかと自分とは異なる考えを知れたのが新鮮で、自分では思いつかない考えを知ることができた。(6 年生)
- ・トマトを使って、人それぞれ考えがちがうということを、改めて知ることができたので、とても楽しい授業でした。また、学校の授業よりも自由に想像が出来たので、このような授業が増えてほしいです。(6 年生)
- ・いつもとは、ちがう図工の授業で楽しかったです。また、友達の色々なところを知ることができて良かったです。学校の先生とちがったので緊張しましたが、これからも、アーティスト・イン・スクールを続けてほしいです。(4 年生)

【社会包摂によるコミュニティ再生事業】

この事業は「表現の森」という事業で、今年度は、引きこもり経験のある若者支援の NPO 法人、高齢者施設 2 か所、母子生活支援施設、地域団体、LGBT 団体と協働して 5 つのプログラムを実施しました。また、新たな協働先として、視覚に障害を持った方たちとの作品鑑賞のプログラムを導入することを検討しており、今年度は試験的に体験プログラムを実施しました。



(1) 「NPO 法人ぐんま若者応援ネット アリスの広場」

×

滝沢 達史（アーティスト）

アリスの広場は、ひきこもり経験者でもある佐藤真人によって 2014 年に前橋市内にオープンしたフリースペースです。ひきこもりを脱しても、学校や社会へ行くことに困難を感じる若者たちが、自宅とは異なる外出先として利用しています。アーティスト・滝沢達史は、「アリスの広場」の若者たちと様々な協働プログラムを行っています。2019 年度は現在、拠点として使用している場所を継続して使用することが困難になったため、施設長の佐藤氏とアーティスト・滝沢氏と共に、新たな居場所づくりとして、LGBT 団体ハレルワと協働し、両団体の若者たちと新たな拠点でやりたいこと等の意見交換を重ね、前橋の街なかにあるオリオン通りに新たな拠点「まちの保健室」を形成した。拠点づくりの傍ら、アーツ前橋の企画展を休館日にゆっくりと若者たちに鑑賞してもらう「ゆったりアーツ」やアリスの広場利用者の個別相談に応じる「滝沢相談室」を実施しました。



(2)「特別養護老人ホームえいめい(社会福祉法人清水の会)」

×

石坂 亥士(神楽太鼓奏者)・山賀 ざくろ(ダンサー)



(2)「じゃんけんぽん大利根前橋(認定 NPO 法人じゃんけんぽん)」

×

石坂 亥士(神楽太鼓奏者)・山賀 ざくろ(ダンサー)

神楽太鼓奏者の石坂亥士氏とダンサーの山賀ざくろ氏は、音や身体表現の即興ワークショップを通じて高齢者施設の利用者と交流しています。継続的にワークショップを行ないながら、高齢者とアーティストの協働の可能性を探ります。また、アートのワークショップと福祉のレクリエーション、それぞれが目指すことの相違点や共通点を再考するプログラムです。昨年度から継続のえいめい、今年度から新たにじゃんけんぽん大利根前橋を活動の場として、計4回のワークショップを実施し、入所中の高齢者の方たちとのセッションを行いました。

【参加者の声】

○予想していた「音楽を聴く会」を見事に裏切られる形でした。楽器に触れられ、自ら楽しめるものでした。

○普段物静かでゆったり行動する方が激しく手を動かして楽器を鳴らしていた。予想を上回るいい反応が見られた。

(入所者の参加者のご家族及び職員向けに実施したアンケートより抜粋)

※入所中の母子の情報保護のため、画像は非公開とさせていただきます。

(3)「のぞみの家(社会福祉法人上毛愛隣者)」

×

廣瀬 智央(アーティスト)・後藤 朋美(アーティスト)

このプログラムでは、前橋市内の母子生活支援施設「のぞみの家」の子どもたちとイタリア在住のアーティスト・廣瀬智央氏と手紙のやりとりを通じたワークショップや、前橋在住のアーティスト・後藤朋美氏と日々の交流を通じて、彼らの生きる現在を表現に繋げ、15年後に開封されるタイムカプセルに詰め込みます。今年度は後藤氏による「心の花」と題したワークショップを開催し、入所中の子どもたちがお母さんに向けて手紙を書き、母子で2輪の花を作って贈り合いました。そのほかに、屋外に出かけ、空の写真を撮影する「空のワークショップ」では、イタリアにいる廣瀬氏と空の写真をエアメールで交換し合いました。昨年度から引き続き、本場のピザ作りを通じて、食文化を学ぶとともに、それぞれが自由な発想でピザづくりをして交流するプログラムを実施しました。前橋市内で煉瓦石窯の製造を中心に事業展開されている増田煉瓦株式会社さんがプログラムに賛同してくださり、石窯の提供やスタッフの方々の派遣をしてくれました。すでにのぞみの家から退所されたご家族がピザづくりに出席してくださり、久しぶりの再会をすることもできました。長い年月をかけてプログラムが継続されることにより、こうした日々の心の機微の蓄積は人と人との関係性をどのように変化させていくのか。長期間にわたるアートプロジェクトの可能性を探っています。



(4)「南橘団地（南橘団地こども育成会）」

×

中島 佑太（アーティスト）

中島佑太は、子どもの想像力や本来的に持っている表現を引き出すワークショップの実践経験をもとに、中島が5歳まで育った南橘団地の住人たちを対象にプロジェクトを行います。1960年代から建ちはじめた南橘団地は、全国各地の団地が抱える少子高齢化などの社会問題も存在します。団地が持つ住環境の特性をワークショップや人々との交流を通じて見つめることで、団地の中に存在する「他者の視線」や「不可視の境界」、また団地の中の人の往来や美術館と南橘団地の行き来の問題から「移動」することをテーマに考えます。今年度は、「美術館ってなに？」をテーマに南橘団地子どもたちと美術館がどんなところかを考えるワークショップを実施しました。アーツ前橋で作品鑑賞を行い、アーツ前橋の収蔵作品から「市民に披露するために企画展で見せたい作品」を選びました。今年度のテーマから、前橋文学館に行き、その裏側や企画展を鑑賞し、アーツ前橋とは異なる分野の文化施設を体験する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、実施が不可能となり、急遽プログラムを変更し、南橘公民館で来年度以降のプログラムの検討や子どもたちと意見交換を行った。また、南橘団地子ども育成会と連携し、クリスマス为主题にしたワークショップを開催し、くす玉づくりを行った。子どもたちの発想に任せた作品制作などのプログラムを実施し、たくさんの子どもたちや保護者が参加して団地の中に世代を超えたコミュニケーションが生まれました。



(5)「セクシャルマイノリティ支援団体 ハレルワ」

×

山田 創平（京都精華大学准教授）

ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）

あかた ちかこ（児童自立支援施設講師）

今年度より新たな協働先として、群馬県内でセクシャルマイノリティ支援を進める団体「ハレルワ」との協働を開始しました。まずは、ファシリテーターとハレルワの顔合わせをかねて、東京レインボープライドパレードに参加するためのプラカードや横断幕づくりのワークショップを行い、後日、パレードに参加し、参加してみでの振り返りを行いました。その後、ハレルワとは群馬県内の地域資源をリサーチする活動を開始し、「温泉」という場所が旧来の共同体の中で性差を考える上で、どのような資源的役割を担ってきたのか、現地資料や温泉業に従事する人へのヒアリングなどを実施しました。また、ハレルワは、滝沢達史氏とアリスの広場と協働し、前橋の街なかの拠点づくりのアイデア出しや施設改修にかかるクラウドファンディングを実施し、「まちの保健室」づくりに大きく貢献してもらいました。

）



(6) 視覚障害をお持ちの方

×

鴻池 朋子（アーティスト）

三輪 途道（アーティスト）

次年度以降、新たな協働先として、視覚に障害を持った方との作品鑑賞プログラムを実施しようと検討しています。今年度は、元群馬県立盲学校の校長先生をされていた多胡宏氏にコーディネートを依頼し、アーツ前橋で開催していた「表現の生態系」展で展示されていた鴻池氏の触れられる作品であったことから、今回のワークショップでは、視覚に障害のある方も無い方も参加して、視覚以外の感覚を使って作品を鑑賞し、お互いの感じ方を伝え合いました。また、同室で展示をしていた三輪氏は、近年視力が失われつつあり、その中で新たな制作の形を模索しています。三輪氏の見ている世界も共有しながら、見える・見えないの境界をみんなで六感を頼りに体験しました。

【参加者の声】

このような対話のテーブルがあることがとてもおもしろかった。絵を見る経験をモノにってしまったようなさびしさを感じた。「見る」経験も「触る」経験ももっといろいろあるはずだと思う。

（参加者向けに実施したアンケートより抜粋）

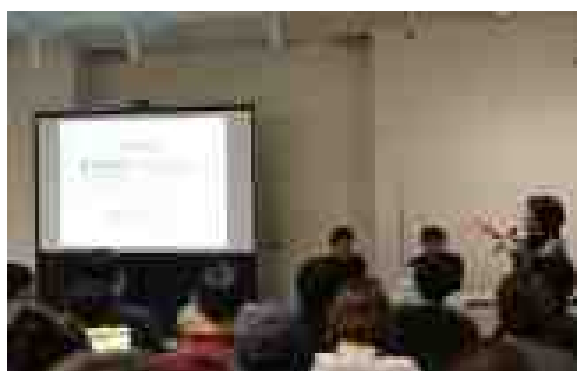
【地域の関係機関との連携による連続シンポジウム】



アートから学ぶコミュニケーション
高齢者施設の実践を通して

アーティスト：石坂 亥士、山賀 ざくろ
講師：山口 智晴（群馬医療福祉大学）

2016年から行っている高齢者施設でのプログラムについて、公開ワークショップ・レクチャー・クロストークを医療・福祉従事者の方を対象に実施。日々のケアに活かすコミュニケーションのあり方について、アートと医療・福祉の両方から皆さんと一緒に考えました。



アートとフクシ

講師：ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）
滝沢 達史（アーティスト）

滝沢氏による企画監修のもと、本シンポジウムを実施した。アートと福祉をテーマに、それぞれが福祉とかわるようになったきっかけから、現在にいたるまで、二人の人生や考えがクロスする形でトークを展開しました。

【参加者の声】

私たちはどうしても相手の痛みを感じ取ることはできないけれど、ちょっとした想像力をもって、継続的に向き合っていくことが大切だと思えるよう努力したいと思いました。

（参加者向けに実施したアンケートより抜粋）



アートを通して考える「マイノリティ」と「市民運動」

講師：あかた ちかこ（児童自立支援施設講師）
間々田 久渚（ハレルワ代表）
山田 創平（京都精華大学准教授）
吉野 晶（弁護士）

群馬におけるマイノリティの現状や、人権状況、いま求められる対応や施策について語り、そのような現状に対してアートをはじめとした「表現」が持ちうる力について考えました。

【参加者の声】

- ・多様な立場のスピーカーの話が交じりあってとてもおもしろかった。
- ・多角的な側面からマイノリティと向き合うことができてよかった。

（参加者向けに実施したアンケートより抜粋）